

佛教大学に

赴任して思うこと

柴田 善守

この四月、大阪市立大学を定年退職して本学に赴任して来ました。すでに非常勤講師として数年講義をして来ましたが、この大学の環境のすばらしさには改めて驚いています。

五十年近い前のこの地域を知っている私は昔の田畑がよい住宅地になり、立派な道路が通じているのにびっくりはしましたが、遠くの比叡山、近くの衣笠山は昔のままの姿があり、そして昔のままの大徳寺がすばらにあり、今宮神社の「あぶりもち」は五十年前の味を思い出させてくれました。

私は社会福祉を専攻しておりますが、仏教と社会福祉の問題を今考えております。十七、八歳のころ私は歎異抄を読みました。悪人正機ということばを知りました。当時に私は深い意味を知らずにあちこちで話し、おそらくはなまじらぬ若者だったろうといま恥じいています。同じころドストエフスキーの「罪と罰」を読み、「悪と自由」なんてい

う生意気なことをいい、これまた厚顔無恥な青年でした。

戦争から帰ってから四十年の間、社会福祉の実践のかたわら、この二つの本を幾度か読みました。五十歳をこえたころ、歎異抄の冒頭にある「弥陀の誓願不思議」ということばがわかるような気がしました。同時に聖書「マタイによる福音書」の最後にある「イエスの復活」にも感動しました。

たとひ法然上人にすかされまひらせて念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ

と親鸞がいう法然に私はおのずから関心をもつようになりました。

私の母親は故郷で八十八歳で生きておりますが、十数年前、この母親の机の上にあった浄土勤行集という名の経本をもらいました。

この経本のなかに「一枚起請文」と「一紙小消息」がありました。

この二つの文書を読んでいますと、私の体はガタガタふるえてくるのです。それから一週間ほど興奮状態になったことを思い出します。「一紙小消息」の

うけがたき人身をうけて、あひがたき本願にあひて、おこしがたき道心を発して、は

なれがたき輪廻の里をはなれて、生れがたき、浄土に往生せん事、悦びの中の悦びなり。……罪人なを生る。況んや善人をやというところで歎異抄の

善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや

を思い出しました。たしかに論理の必然性として親鸞のつきつめたきびしい境地は理解できるのですが、法然のやさしさを感じるのです。法然もみなさんと同じように努力していますとわれわれに語りかけているように思いました。

その後法然も親鸞と同じことばをいつているが、表に出さなかったということを聞きしました。そこに法然の人柄があるように思います。

法然の画像はふくよかなゆたかな姿にかかれていますが親鸞の自画像は眉のつりあがったきびしい顔をしています。法然が地方豪族の子であり、親鸞が貴族の子であるといわれていますが、私は逆のように思います。戦乱の世を生きた師弟が宗教のやさしさときびしさをしめしているように思います。

(しばた よしもり 社会学部教授)